別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　　永井　久美子

本論文は「物語絵巻に見る後白河院政期――『伴大納言絵巻』『彦火々出見尊絵巻』『吉備大臣入唐絵巻』を中心に」と題し、十二世紀後半に後白河院のもとで制作されたり、蓮華王院の宝蔵に収められたさまざまな絵巻のうち、物語絵巻について、同時代の政治・社会状況とかかわらせてその制作意図を明らかにし、これに深く関与した人物を推測したものである。考察の対象は美術史・日本史・日本文学の領域に及び、渉猟した史資料や参考論文も多数にのぼる労作である。全体は序章と終章を挟んで本論の三編から成る。

序章では、後白河院にかかわる絵巻十四点を挙げたうえで、数多く制作された行事絵の問題、後白河院政を支えた信西（藤原通憲）とその一族の絵巻とのかかわり、副題の三つの物語絵巻の伝来など、より大きな視点から研究史の現在を展望する。

第一編「『伴大納言絵巻』における良房像と清盛――忠臣としてのイメージ」は、貞観八年（八六六）に伴善男が引き起こした応天門の変を描いた絵巻をめぐる考察である。善男の陰謀が露見するきっかけが子ども同士の喧嘩にあったという詞書独自の語り方について、『日本三代実録』の史実や『江談抄』の説話と比較して確認したうえ、ことが露見したいきさつについても、一つには無実の罪を着せられた源信が天道に訴えたことがあり、そこには菅原道真が左遷されたのち天拝山で無罪を訴えた説話の流入があるのではないかと指摘し、二つには、政務を弟の良相に譲っていた太政大臣藤原良房が嵯峨天皇のもとに馳せ参じ、早まった裁定をくださないよう諫めた結果であるという。

永井氏は、良房の果たした役割が、ちょうど太政大臣を辞して出家し、娘徳子を高倉天皇のもとに入内させた平清盛の政治的な立場に近いことに注目し、この時期、安元の大火以外にも火災が頻発したこと、絵巻制作のまとめ役として信西の息子の静賢が考えられることなどから、後白河院が高倉天皇の補佐・支援を清盛に期待するという願いがそこにこめられていたと論じる。

第二編「『彦火々出見尊絵巻』における龍宮と龍王――厳島および清盛のイメージ」では、記紀神話の海幸山幸を題材とする同絵巻について、記紀や『信西日本紀抄』ほかの中世日本紀の類と比較しつつ、後白河院政期の動向との関連を考察する。絵巻詞書の独自性を数多く指摘し検討する中で、永井氏は、弟の御子の対面相手が海神でなく龍王と呼ばれていること、弟の御子は龍王の姫君の出産場面をのぞき見るが、その後も龍王の一族との関係は途切れず再訪して援助を受けること、弟の御子が帝になることなどに着目する。

龍王という呼称からは、『源氏物語』若紫巻に「海龍王の后になるべきいつきむすめななり」と見える明石入道の一族の物語が連想され、龍宮に近い蓬莱にたとえられる厳島社を厚く信仰した清盛が思い浮かぶ。すでに美術史・日本史においても明石一族や清盛らの平家納経と関連づけた研究があるが、永井氏はそれらの論の不備を批判し、絵巻の制作時期を清盛娘の徳子の入内や安徳天皇懐妊の時点と見る説を排し、その中間にあたる後白河

院の厳島御幸以後間もなくと推定し、制作の意図は崇徳院の弟皇子である後白河院が清盛をあくまで王権の補佐役にとどめることにあったとする。

第三編「『吉備大臣入唐絵巻』の真備像に見る信西のイメージ――後白河院政期における対外関係と絵巻」で取り上げる絵巻は『江談抄』の説話にもとづくものである。『江談抄』は文人政治家大江匡房の言談を弟子の藤原実兼が記録したもので、学者政治家の信西は実兼の子、後白河院の腹心で「後三年絵」の制作に関与し、蓮華王院の執行をつとめた静賢は信西の子であった。

絵巻の粗筋は、入唐した奈良時代の政治家吉備真備はその才能を妬まれ幽閉されるが、霊鬼の協力を得て三つの難題を解決し、無事帰国するというものである。いずれも史実ではないが、真備は日本に『文選』・囲碁・「野馬台詩」をもたらしたと称えられる。

当時は清盛らにより日宋貿易が盛んであり、後白河院が宋人を謁見した記録の残ることも知られており、絵巻から後白河院の屈折した自国優越意識を読み取る説や真備の人物像に学者出身の道真を重ねる読みもあったが、永井氏は新たに信西の像を重ねる読みを提案する。

終章では以上の三編をしめくくって、三つの絵巻が後白河院と平清盛の関係が良好であった時期に、信西亡きあと、父後白河院と対立する二条天皇にも奉仕していた清盛を味方に付ける狙いで制作させた可能性があること、制作のまとめ役には『江談抄』『信西日本紀抄』が手元にあり、『源氏物語』にも通じた後白河院側近の人物がふさわしく、静賢の可能性が最も高いことをいってまとめとする。最後に、本論では取り上げなかった「長恨歌絵」「道鏡法師絵詞」や『粉河寺縁起絵巻』『信貴山縁起絵巻』などについても簡単な考察をおこなっている。

永井氏の功績は、これら三つの物語絵巻の制作には信西の一族が深くかかわっていたことは確実で、具体的には静賢の名が挙げられるとしたことであろう。絵巻と同時代の政治・社会状況とのかかわりとか、後白河院側の制作意図とかについての考察の結果も、先行研究を批判的に検討したうえで初めて提出したもので、今後は一説としてかならずかえりみられねばならないものと判断される。ここまで絵の分析については言及しなかったが、三つの物語にわたってそれぞれ行き届いた研究史の整理をおこなった後、従来指摘されていた見方をより徹底させたり、独自の着眼から物語の筋とからめた読み取りをおこなうなど、研究を大きく前進させたことは間違いない。

審査委員からは、静賢については今後さらに追究する必要がある、絵巻をだれが鑑賞したのか、清盛にも見せようとしたのかどうか踏みこんだ判断があればよかった、物語を史実と付き合わせることについて方法的な自覚がやや甘いのではないか、考察してきたことの最後のまとめが簡略すぎないか、もっと緻密な表現を心がけてほしいなど、厳しい注文も出されたが、学問的に境界領域にあたるこの分野できわめて貴重な成果を挙げていると評価する点で全委員の意見が一致した。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。